

中長期目標 (学校ビジョン)		今年度の 重点目標		1 確かな学力の定着を図る学習指導の充実 2 自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実 3 豊かな自己表現力の育成		
評価項目	評価の具体項目	年 度 当 初		評 価 結 果 (10月)		
		現 状	目 標 (年度末の目指す姿)	目 標 達 成 の た め の 方 策	経 過 ・ 達 成 状 況	評 価
確かな学力の定着を図る学習指導の充実	(教務) ○個別の年間指導計画を指導と評価・改善に生かす。	○教科等の個別の年間指導計画を作成し、単元(小中高)や活動(幼)のねらいに対して、指導の反省欄を設けて指導の充実を図っている。教科ごとに「つまずきの記録」を取ることも定着し子ども達の指導に活かす資料として機能しつつあるが、内容にばらつきや偏りがあること、教員間の情報の共有が十分ではない等の課題がある。	○全教員が、個別の年間指導計画を指導、評価、改善に活用して、授業を充実させている。	○研修会等を開催し、個別の年間指導計画の運用やつまずきの記録の意義について、共通理解をはかる。 ○「つまずきの記録」などの、個別の年間指導計画のよりよい記載方法について、教務部内で検討する。 ○「つまずきの記録」について、定期的に入力状況を確認し記載を呼びかける。 ○授業の反省や子ども達のつまずきなどの情報は、学部研究会・教科会などで共有化する。		
	(研究) ○聴覚障がい教育の専門性の向上を図る。	○聴覚障がいのある幼児児童生徒それぞれの個に応じた指導を行うことが求められており、聴覚障がいに関する職員研修、一人1授業や参観ウィークを行い、授業力の向上に努めている。	○ニーズに合った研修を企画する。 ○参観ウィークや研究授業の機会に全教員が他学部の授業を参観する。	○聴覚障がい教育に関する職員研修を計画、実施する。計画の際は、教職員のニーズを抽出するとともに校内研究と絡めた内容を優先する。 ○他学部への参観ができるよう、各学部で参観計画を立てる。また授業評価シートを見直し、参観の各視点で学部間の系統性がわかるようにする。		
	(研究) ○幼児児童生徒一人一人の実態やニーズを総合的・多面的にとらえ、一貫性と一丸性のある指導と支援をAPDCAサイクルで行う。	○幼児児童生徒の数は少ないが聴覚活用や認知特性などの実態は多様であり、そこに起因するコミュニケーションや言語獲得・拡充の困難さがあり、また基礎学力の定着にも課題を生じている。	○各学部ごとにチームアプローチによる幼児児童生徒の実態把握を行い、APDCAサイクルによる授業改善を繰り返し、授業力を向上させる。	○各種発達検査や日常観察を通して実態把握をする。 ○実態把握から個に応じた具体的な指導や支援を工夫する。 ○学部研究会を通して幼児児童生徒の実態や指導法について共通理解をし、授業改善を図る。		
自立と社会参加をめざしたキャリア教育の充実	(教務) ○個別の教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を連動させ、幼児児童生徒の支援を充実させる。	○キャリア発達段階表に連動した個別の教育支援計画の運用が軌道にのったが、キャリア発達段階表の活用状況は必ずしも十分とはいえない。(キャリア発達段階表を見るのは、ケース会議や懇談時に限定されがち)	○すべての教職員が個別の教育支援計画の運用に、キャリア発達段階表を効果的に活用し幼児児童生徒の指導に活かしている。	○個別の教育支援計画の運用等において問題点があれば、各学部の意見等を吸い上げ、個別の教育支援計画及び運用等をよりよいものへ改善していく。 ○キャリア発達段階表の扱い方・活用等について教職員の共通理解をはかる。(教職員からキャリア発達段階ひよに関する質問等を募り、回答していく形で共通理解をはかっていく)		
	(総務・情報部) ○学校公開を通して、本校教育の理解と啓発を図る。 ○タブレット端末、電子黒板等の情報機器を用いたICT教育を推進する。 ○携帯電話やインターネットについて、生徒が正しい知識を身に付けて活用できるように支援する。	○学校公開では来校者も増え、アンケート回収率も高まってきている。 ○ICT機器を用いた授業が多く行われているが、さらに使用できる機器を広げたり、使い方を深めたりする余地があると思われる。 ○外部講師による研修を受けて、インターネットやSNSなど情報モラルに関する危険性についての知識を得ているが、中高生は実際の行動に結び付けられないことがある。	○学校公開の案内などにより、来校者を増やし、本校教育への関心・理解を深める。 ○個々の教職員が、それぞれの授業の中でICT機器を効果的に活用する場面を増やす。 ○生徒が、インターネットやSNSの危険性について意識し、安心・安全な生活ができる力を育む。	○学校公開の案内文書や野外掲示により周知を徹底したり、「とりろうだより」の内容を工夫したりする。 ○教職員対象のICT機器活用のための研修会を開く。合わせて情報機器の維持・管理に努め、機器を使用しやすいうように整備する。 ○外部講師による、具体例を交えた研修会を開く。 ○児童生徒にアンケートを行い、安心で安全な情報機器利用ができていくか確認し、意識づけるようにする。		
	(生活安全部) ○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を、心身の健康、交通事故や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的に幼児児童生徒の実態に応じた指導を行う。	○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画を3本の柱として、心身の健康、交通事故や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的に幼児児童生徒の実態に応じた指導を行っている。	○心身の健康、交通や災害からの安全確保、健康的な食生活について理解を深め、健康で安全な生活習慣が身につくように日常的かつ継続的に指導に取り組み、幼児児童生徒の実践力の向上を図る。	○学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画の中から本年度の重点取組項目を8項目決定し、事前の打ち合わせと事後のアンケートや部会による振り返りを通して、課題を明確にし、その後の取組に活かせるようにする。		
(進路) ○キャリア教育や進路に関する情報を発信する。 ○実態や発達段階に合わせて、社会人として必要な力をつけていけるようにする。	○各学部で取り組まれているキャリア教育の内容が他学部十分に伝わってない。 ○卒業生や聴覚障がい者の現状と課題について知る機会が少ないため幼児・児童・生徒に還元して十分に活かすことが難しい。	○進路だよりを発行し、各学部のキャリア教育取組状況の共通理解を図る。 ○進路担当が発信する情報により幼児・児童・生徒の指導や支援を確認・工夫・改善している教職員数6割をめざす。 ○卒業生のフォローアップ状況や聴覚障がい者を支援している関係機関の講演の内容を指導や支援に活かしている教職員数6割をめざす。	○毎月、進路だよりを発行する。 ○掲示板等で「求人状況」や「進路に関する最新情報」を発信する。 ○卒業生のフォローアップ状況を学期に一度、報告する。 ○「聴覚障がい者の現状と課題」をテーマにした職員研修を実施する。			
豊かな自己表現力の育成	(自立活動部) ○自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うことができるよう、環境や教材教具、年計の整備に努めるとともに、専門性を高めるための職員研修を行う。	○発音、手話、聴能に関する職員研修を行っている。 ○補聴環境の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行っている。 ○自立活動の指導に関わる教材教具の整理や、教科と自立活動の関連が記録しやすい年計の作成に取り組み始めた段階である。	○職員が、自立活動に関わる専門性を高め、学校全体で教材、教具を共有、活用して自立活動の指導を行う。	○補聴環境の整備のため、聴能関係の道具の管理や点検、補聴器店による定期点検の日程調整を行う ○自立活動の専門性を高めるための全体研修会を年3回行う。 ○学部を越えて共有できる教材教具の整理のために教材フォルダの整理と教材教具の把握、管理場所の決定を行う。 ○教科と自立活動の関連が記録しやすい年計の作成、試作を行い、来年度の実施につなげる。		
	(生活安全部) ○クラブ活動や部活動を通して、児童・生徒の自己表現力や自主性を高めることができるように指導・支援する。	○活動に対する興味・関心は高いが、教員の指導に頼りがちであり、十分に自主性を発揮しているとは言えない。各部で部会を開き、活動内容に見通しが持てるよう支援を行っている。	○活動を通して児童・生徒の自己表現力や自主性が高まるように指導・支援する。	○児童・生徒との話し合いを通じてクラブ・部活動として、また個人としての目標・課題を明確にすることで意欲的に活動に取り組めるようにする。		
	(生活安全部) ○児童会・生徒会において、児童・生徒が計画に基づいて見通しを持って活動していけるように指導・支援する。	○児童会・生徒会役員になった児童・生徒は、その責任を果たそうとしている。話し合いにおける活発な意見交換や見通しを持って活動を進めていくこと、また個々の意見を取り入れてより良いものにまとめていくことについてはまだ教職員の支援が必要である。	○児童・生徒が自ら計画を立て、児童会・生徒会の運営を行う。学校生活の充実と向上のために問題を協力して解決できるように指導・支援する。	○児童会・生徒会の年間計画を作成し、役員の児童・生徒を中心に話し合いや活動の準備に関する助言や指導・支援を行う。		

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%) C:変化の兆し(60%) D:まだ不十分(40%) E:目標・方策の見直し(30%以下)